宣教への警鐘

2001/3/3

日本アッセンブリーズ・オブ・ゴッド教団
西九州伝道所牧師
佐々木正明

生きるのも主の栄光のため。死ぬのも主の栄光のため。飲むのも食べるのも主の栄光のため。これが成長したクリスチャンの生き方、すべてのクリスチャンが目指す生き方です。クリスチャンにとっては、すべての行為が礼拝だからです。したがって、宣教もまた礼拝の一部として、聖い主なる神の臨在を、ひしひしと感じながら行なうものです。このような基本的なことを心において、現在の私たちの宣教を見ると、どうしても、警鐘を鳴らしておかなければならないと思われる事柄が、いくつもあります。

§

まず、宣教が宣伝に取って代わられていることに、警鐘が必要です。宣教とは、神の国の福音を語り、宣言していく働きです。ところが私たちの間では、最近、この働きが商業主義の誇大広告、美しい宣伝、耳障りのいいキャッチフレーズに変わってしまったようです。まるで、痩せる薬の宣伝のような、怪しげな「宣教もどき」が幅を利かせています。そこには、至聖の神に対する厳かな畏れも無く、うそ偽りや誇大宣伝を見抜いておられる、神の臨在に対する意識がほとんど感じられません。

次に、宣教の場がエンターテイメントの場に取って代わられていることに、警鐘を鳴らさなければなりません。福音を、いかに解りやすくまた受け入れられ易く提示するかということよりも、飾りつけや照明や音響に心を砕き、あたかもロック・コンサートがやるように、集団ヒステリー現象を起こそうと操作し、説教者や歌い手などを、スターでもあるかのように演出することに力が注がれています。すべてをエンターテイメント化しなければ、気がすまないのがアメリカ文化です。その中で醗酵されたキリスト教は、宣教もエンターテイメントにしてしまいました。そこでは、峻厳な絶対の神に対する畏敬、礼拝の意識が希薄になっています。それが、私たちの教会にも、濾過されないまま入り込んでいます。

§

さらに、未信者への宣教が、信徒の奪い合いに取って代わられていることにも、警鐘が鳴らされるべきです。大型店舗の進出が、商店街を壊滅に追いやっているようなことが、キリスト教界にも起っています。賜物という目玉商品と、潤沢な資金で運営される教会や集会に、小さな教会の信徒たちは、次々と奪われています。まじめに、真剣に、地道に宣教の業を続けることが、ばかばかしいものであるかのような風潮が、少しずつ広がっています。隠れたことを見ておられる公平な神に対する礼拝の心が、失われてきたのです。

それから、古くから伝えられてきた福音の本質が、場当たり的で目新しい、枝葉末節な教えに取

って代わられていることにも、警鐘が必要です。キリストの血潮による贖い、永遠の命、神への献身が、繁栄の福音、積極的思考、預言、奇跡、使徒、預言者、按手、賜物の分与、教会の刷新などという事柄に、すりかえられてしまいました。神の言葉である聖書への真摯な態度、聖書を通してお語りになる神に対して、厳かに自分のたたずまいを正す心、襟を正す思いを失いつつあるのです。

§

まだまだ警鐘が必要です。しかし最も大切なのは、これらの風潮の背景、あるいは土壌となっている、現代資本主義と手を組んだキリスト教に対して、警鐘を大きく鳴らすことです。激烈な競争意識で犯罪すれすれのところで儲けを追及し、自分たちさえ得をすればそれでよいという、現代資本主義の弱肉強食の意識で宣教をしたのでは、たとえどのように教会を大きくしても、主はお喜びにならないと知らなければなりません。イエス様のお言葉に従うならば、私たちは、資本主義の中に生きながらそれに毒されず、互いに思いやりをもって助け合い、分け合い、補い合って行く生き方をすべきなのです。

使徒パウロは、女性蔑視の社会で女性の尊厳を高揚し、女性の身分を確立する道を開きました。奴隷制度の社会で、あらゆる差別を超える福音を提示し、奴隷制度を打ち壊す鉄槌にしました。パウロがその時代性の持つ悪を福音の力によって打破してきたように、私たちは現代資本主義の中に生きながらも、これに取り込まれず、その悪魔的精神と戦っていくべきなのです。